

復活節第3主日

第一朗読 使徒言行録 5・27b－32、40b－41

福音朗読 ヨハネ 21・1－19

2019.5.5

高円寺教会 7:30 ミサ

サレジオ会 濱口秀昭神父

ヨハネ福音書を振り返ってみたいと思います。大きく分けると、二つに分けられます。イエスと共に食事をする。もう一つは、イエスからペトロが問いかけられる場面です。そして、最後に結びとして第一朗読を見たいと思います。

今日のヨハネ福音書の前半部分、ペトロを初めとして数名の弟子たちは、自分たちがイエスと出会う前に、あるいは出会った場所、ガリラヤ湖へ行っています。ようするに、イエスが十字架につけられ、その後に復活しますけれども、自分たちの仕事に戻ったということでしょうか。漁師だった彼らは、自分のふるさとに戻って、そして漁をするわけです。彼らは漁の専門家、漁師でした。漁の専門家が一晩中漁をして何もとれなかった。おそらくがっかりして岸に戻ったことでしょう。そういった場面に一人の男の人が立っていた。「何か食べる物があるか」と言うた。何もとれなくてがっかりしていた漁師の弟子たちは「ありません」と答えた。このイエスの問いかけ、問いかけた人がもし漁師仲間であって、しかも大先輩の漁師であったとすれば、「ああ、今日何もとれなかったんですよ。どうしましょうか。何かいい方法はありますかねえ」と、「今晚どうしたらいいんでしょう」と、そういう相談をしたいところでしょうが、自分たちが見ている目の前の男は誰だか分からない。おそらく、イエスの姿は別の姿になっていたんでしょう。

そういった分からない者の声をこの漁師であった弟子たちは聞くわけです。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」という言葉をまともに受けて、彼らは、しかも夜でない、明け方、陽が差そうとしていたかもしれませんが、そんな時間に網を打つわけです。常識はずれのことをやるわけです。どうしたんでしょう、とれるはずがない時間帯、しかもとれるはずでない岸からわずかな距離しか離れていないところで網を打った。そしたら、たくさんの魚がとれたんですね。イエスが愛しておられたあの弟子がペトロに「主だ」って叫ぶわけです。ペトロはびっくりして、上着をまとして湖（うみ）に飛び込むわけですね。どれほど驚いたか。その驚きようが分かります。

このあとイエスは岸で火をおこして魚とパンを焼いていたわけですから、その食事、朝食に誘います。ただ自分が用意したものを食べさせるだけではなくて、漁師たちが得た魚もとってきて一緒に焼いて食べさせるわけですね。イエスの今日のわずかな個所を見ても、イエスが弟子たちに語りかけることば、動詞と言いましょいか文法的には、まず「網を打ちなさい」、それから、「魚を何匹か持ってきなさい」、そして、「食事をしなさい」。ごく普通の、どこかのおじさんが親しい人たちに語りかけるようなことなんですよ。このように、神の子であるイエスはわたしたちに近づきやすく、また理解しやすく、ひとつひとつのことを話してくださいます。食事をしたあとに、どんなにこの弟子たちは喜んだことでしょうか。「これでもう三度目であった」。復活したイエスに出会う弟子たちは、もう三度目なんです。「三度」ということばはこの後半のペトロとイエスの会話の中にも出てまいります。

後半に移りましょう。イエスはペトロに問いかけます。「シモン、この他の人たち以上にわたしを愛しているか」って問いかけられて、ペトロがすぐ、「主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」。そうすると、イエスは「わたしの小羊を飼いなさい。牧しなさい。世話をしなさい」、そういったことを繰り返すわけなんです。「もうあなたがわたしを知っているのは、わたしの隅から隅まで、主イエスよ、あなたはご存じではないですか」と言いたいでしょう、ペトロの気持ちでは。でもイエスは問いかけるわけです。何故でしょうか。ペトロはこの決心を固めていたと思います。ペトロがイエスにとことんついて行くように、イエスは祝福のうちに、その意志を、決意を固めていたと思います。揺るがない信仰。そして、そればかりではなくて、これからのち、ご自分を知った者として証していく者となるように、その頭（かしら）として活躍するように、主イエスはペトロを何度も何度も、意志を固め、そして決意を促し、「わたしを愛しているか。本当に愛しているか。確かか」と念を押しながら、ペトロを力づけていくわけなんです。そして、最後の言葉はこうです。「わたしに従いなさい」と言うわけですね。「わたしに従いなさい」。イエスを証するのは、ペトロに限らず、他の弟子たちもそうでした。後に、サウロと言われている時代にキリスト者を迫害していた、後のパウロもこの人の中に加えられ、そして力強く主イエスを証していきました。

この大きな変化。弟子たちが強い意志を持っていたと誰も思わないでしょう。イエスが十字架につけられたときにほとんどの者が逃げていったわけです。こ

のペトロは「いや、あんたなんか知らない」と、問われたときに否定して、そののちに鶏が鳴いたという話があるじゃないですか。イエスがどれほど寂しかったか、人間として。イエスがペトロを見つめる眼（まなこ）がどれほど慈しみ深く見ておられたか。自分たちが裏切ったあのイエス、でも今こうして復活したイエスに三度も会って、そして、今、イエスの生き様をすべて見てこられたこのペトロ、また他の弟子たちを、今勇気づけるわけです。「わたしに従いなさい」。ペトロは従います。行きたくないところへ連れて行かれる最後の最後まで、殉教するまで、ペトロはイエスに従いました。神の愛をしっかりと受けたからです。神の愛をしっかりと感じ取ったからです。神の愛を受け止めて生きる決意を固めたからです。そしてなによりも、いつも神と共にあったからこそペトロはこのようにキリストを証する生涯を終えたのではないかなあと思います。

第一朗読の中で、今日、使徒たちの宣教、大祭司たちが、この元気よくイエスを証していく使徒たちに対して、「イエスの名によってもう教えるなど言ったではないか。まだやってるのか」と咎めるわけです。そうしたことに対して、ペトロを初め使徒たち、何と答えたか。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」ときっぱりと、そして毅然として、答えるわけです。「あのイエスはなんのために来たのか。わたしたちの罪のゆるし、回心、そして救いへと招くために来られた方なんだよ。わたしたちはこの事実をすべて見てきた。そして今、わたしたちは証しする者であり、証しするんだ」と言うわけです。「わたしたちばかりではなくって、わたしたちに示してくださった神、一つのペルソナ、聖霊もそれを証する」と彼らは豪語するわけです。キリストに生かされた使徒たち、生涯力強く証して、そして命までも捧げました。

もう一度彼らの最初を見てみましょう。漁師だった彼ら、あるいは収税所に座っていた者、いろんな者が呼ばれますけれども、特別に国の中で、地方の中で有力者だったものは誰もいません。ある意味で小さき者が主に招かれて、そして育まれて、力強くキリストを証しする者に変えられていくわけです。わたしたちの信仰は、決して強いものではないと思いますが、でも、主が共にいて、わたしたちと共に歩んでくださるときに、わたしたちの強くはない信仰が、確かな信仰として、生涯生きていくだけの信仰に変えられていくのではないかなあと思います。その基礎は、主に信頼し、主に委ね、主と共に歩む、ということではないかなあと思います。

今日、ペトロを初め主だった弟子たち、とりわけティベリアス湖畔、ガリラヤ湖で漁をしていたこの使徒たちの姿を見ながら、わたしたち自身も主のあとにしたがって、主を力強く証していく者となることができますように、ミサを続けてまいりたいと思います。